

Journal des dames et des modes

(ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード)

Paris : [s.n.], 1797—1839

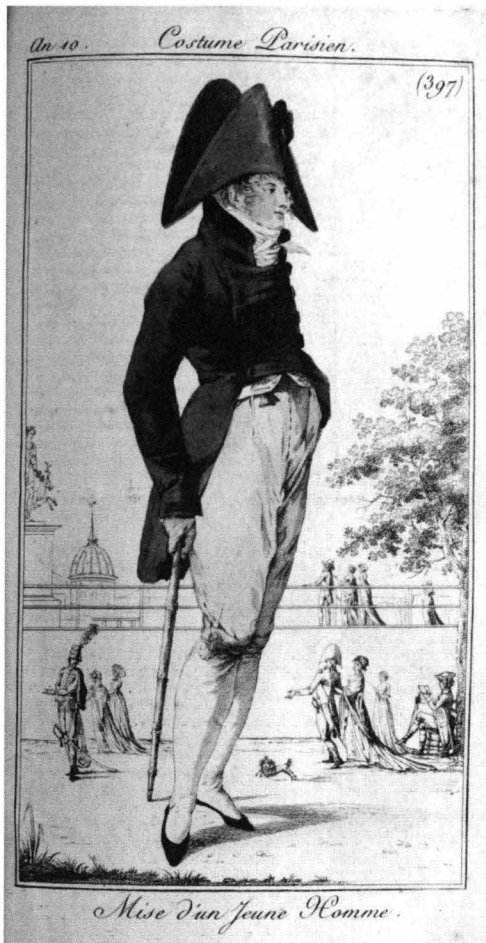
Hiler p. 356, 486 Colas 1561—1564 Lipper. 4583

モード伝達のための銅版画を綴り合わせた定期刊行物が確立してくるのは18世紀も第4四半期に入ってからのことである。フランスでは、イギリスにやや遅れて1797年、“以後のモード誌のスタイルを確立させた”といわれるこの「ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード」(以下JDMと略す)が発刊された。フランスでは「ギャルリー・デ・モード」などの定期的な服飾版画集は既出版されており、このような美しい服飾版画に対する要求とジャーナリズムの発達の結果、このJDMが誕生したとみるべきであろう。

創始者はセレック (Sellèque 生没年不明) と印刷業者のクレマン夫人 (M^{me} Clément 生没年不明) で、ラ・メザンジェール (Pierre de la Mésangère 1755 [1761の説もあり] —1831) の協力のもとに1797年3月に出版が開始された。セレックはパリ西南100kmにあるシャルトルのコレージュで修辞学を教えていたが、やがてパリのフラン・ブルジョワ通りに本屋を開き、創刊号はこの店から発売された。ラ・メザンジェールはパリ西方350kmの町、ラ・フレッシュの王党派のコレージュで教鞭をとっており、カトリック系修道会の一員でもあったが、大革命後パリに出て出版業を始めた。そして、1799年にはラ・メザンジェールがJDMの出版責任者となり、この頃、店はモンマルトル通りに移っている。以後1831年に彼が死去するまで“ラ・メザンジェールのジュルナル”として知れわたり、1831年以後は“ラ・メザンジェール創始の”とタイトルに付されて1839年1月まで出版は続けた(途中、1837年にガゼット・デ・サロン、ジュルナル・デ・ダーム……と誌名は長くなる)。

42年間にわたって各号に1枚の美しいプレートのとじ込まれた8ページからなるオクターボ判のこの小冊子は、5のつく日に発売され、購読者はそれを心待ちにしていた。読者はパリのみならずフランス地方都市はもちろん、ヨーロッパ圏内に及び、また、ほぼ同じプレートを転載した他国版もいくつもあった。たとえば本館にはフランクフルト版(1805—1826 12 vols.)がある。ちなみにパリでの値段は1798年当時で年30フランであり、1799年から年36フランとなり、最終刊までこの値段であった。予約購読者数のみでも1803年に830人、1813年に1455人であったことが、パリ国立資料館の資料から明らかにされている。もちろん、予約者以外にもパリ市中の本屋で売られたのである。通し番号の打たれた美しいプレートは通巻で3624枚に及んでおり、本館ではこれらのうち約87%にあたる3148枚を擁している。

さて、記事の内容とプレートについて具体的に見ていこう。記事の内容は、パリの情景や催しもの、新しい習慣や音楽、モード、プレート解説が主なもので、例えば、1802年10月(革命暦11年葡萄月)のある号では、美術館、外国のリセに通う女性からの手紙。眼鏡、逸話、サン・マルタン劇場、モードとなっている。これらの記事は、ラ・メザンジェールをはじめ、文学や学問を志していた多くの青年たちの手で書かれたものであろう。プレートの方は若干の研究が進み、幾人かの版画



1802年 若い男の装い



1810年 羽根の紐飾りつき麦わら帽、ドレスのプリーツの飾り

師の名が知られている。例えば、1813年から1817年にかけてサイン入りプレートを残しているオラース・ヴェルネ（Horace Vernet 1789—1863）は、とりわけ優れた気品の高い作風で名高く、また、父親のカール・ヴェルネ（Carle Vernet 1758—1836）も1802年から1810年にかけて制作していたことが明らかにされている。さらに、1805年から1807年にかけて、ペシュュー（Pécheux）、ラブルス（Labrousse）、ガルビッツァ（Garbizza）他5名、1807年から1809年にかけて、オズ（Auzou）などの名がわかる。しかし、下絵師、版画師、摺師、手彩色者と複数の人々の手から成った当時の版画を、一人の個人名に帰する必要はないのであろう。舞踏会、散策、パリ市中などでの毎日の人々の姿を写し取った楽しいプレートを私たちが深く味わうことこそ作者たちが望んでいたことであろう。何枚かのプレートには、下絵を描くときにヒントを得たパリの通りや劇場名が刷りこまれており、シャン・ゼリゼやリヴォリ、オペラ座などが散見できる。このような場所で当時の洒落者たちはお互いにおしゃれを競ったのであり、パリ・モードというタイトルのもと、版画師たちは彼らを描き出したのである。そして、このプレートはヨーロッパ中に配られた。やがて、帝政、王政復古と社会背景が変わるにつれ、クチュリエールや髪型装飾師などの店の名が載るようになり、モデルの存在を想像させるプレートも登場しはじめる。現代のファッション・ジャーナリズムの胎動を感じさせる興味深い時代なのである。

各号8ページの内1ページを占めるモード欄は、パリでの流行を詳細に記したもので、男女の髪型、流行色、素材などがつぶさに描写されている。例えば、「つい最近までチュール製のボネにレース飾りを施したサテン裂があしらわれていたが、今はすたれている。太縞のリヨン絹製のターバンが流行しはじめたが、このターバンは大きな襷がとられ、その襷は丸みを帯びたもの、鋭角的なもの、とさまざまで、眼びさしになるように、あるいは片方の耳のほうへ張り出すように、と用いられるのである。極楽鳥の羽根飾りや宝石が、この髪型にはさらにつけ加えられる……」（1820年2月5日号）。モード欄の約1/5の部分訳であるが、その具体的描写の言葉の豊かな効果に私たちは驚く。現代のモード誌と比べてどちらが布地のもつ味わいを語り尽くせているのだろうか……。20世紀初期にこのラ・メザンジェールのJDMを復活させるべく、同タイトルの服飾誌が作られた（Journal des dames et des modes 1912—1914）が、この事実もやはり、このラ・メザンジェールのJDMの持つ、服飾誌史上の金字塔的意義を物語っていると思われる。

（斎藤多香子）

『文化女子大学図書館所蔵 欧文貴重書目録 解題・目録』より転載